

空には今も龍神が住んでいる。小さな箱庭の中で、愛する少女と共に。

鈴は今年で16歳になった。幼い頃は両親と共に海外に住んでいたが、8歳の時に父を戦争で亡くし、同じ年に母を結核で亡くしてしまった為、その後たった一人で日本に戻って叔父の勇と、その妻の久子夫婦の所で世話になっている。

鈴が世話になっている佐伯家は代々続く女系の家系で伯爵の爵位を持っていた。勇はそこに婿養子という形で入ったのだと母から聞いていた。

そのため今の当主は実質久子のようなものだ。大きな屋敷は純和風の家屋で庭には大きな蔵があり、そこが鈴の部屋だった。

叔父夫婦には二人の娘がいる。名前は蘭と堇という。蘭は鈴より1つ上で、堇は同い年だ。

蘭は高等女学校では常に成績優秀で教師や友人達からも一目置かれる存在だったそうだ。このまま進学するかどうか随分悩んでいたが、結局進学を取りやめて自分の夢に向かって邁進する道を選んだ。その夢を鈴には教えてはくれなかったけれど、蘭はとても優秀だ。きっとその夢を叶えるだろう。

一方の堇は何とか実科高等女学校に入りはしたものの、久子の話では蘭ほど優秀ではないようだ

った。それでも学校に通えるだけで凄いい時代だ。こんな二人が鈴の唯一の自慢だった。

ある日の事。鈴がいつものように庭仕事をしていると、勇の部屋からこんな声が聞こえてきた。

「絶対に嫌よ！ 娘をあんな得体の知れない所へ嫁がせるなんて！」

「こら、そんな大きな声で」

「私は反対よ。ええ、ええ、大反対です！」

叔母の久子の声はそこで一瞬途切れ、続いてさつきとは打って変わって明るい声が聞こえてきた。会話の内容が気になった鈴は、いけないと思いつつも手を止めてこっそりと縁側から勇の部屋の中を覗き込む。

「そうだわ！ あの娘に行かせるのはどうかしら？」

「……鈴か？」

勇が怪訝な顔で聞き返すと、久子は嬉しそうに頷く。

「しかし鈴は佐伯の者ではないんだぞ？ 俺の姪だ。的場の者なんだぞ？」

「あちらの条件は佐伯家に居る娘ですもの。問題はないはずよ。それにうまく結婚まで漕ぎ着けた

ら侯爵家と繋がりが出ていいじゃないの！でも、もしもあの子があちらの家から追い出されたらもう恥ずかしくて外には出せないわ。その時は仕方がないから一生蔵に閉じ込めてしまふかしかないわね」

そう言つて久子はほくそ笑んだ。

鈴はそこまで聞いてそつとその場から離れた。久子に好かれていとは思つていなかったが、その先を實際に聞いてしまふときつと傷ついてしまふ。いつそ外に放り出してくれた方が気が楽だ。鈴はそのまま逃げるように調理場に向かい、いつものように淡々と皆の分の料理を作る。そしてその残り物で自分の夕食におにぎりを1つ、漬物を三切れだけ持つて蔵に戻つた。

元々は鈴も母屋に住んでいたが、ある事件をきっかけに鈴は母屋に上がることすら許されなくなつてしまつた。

けれど今はそれで良かったと思つている。ここに居ればヒステリックに鈴の事で怒鳴る久子の声も聞こえてこない。

蔵に戻つてしばらくすると、いつも蔵には外から鍵がかけられもう朝までここからは出られない。食事は冷たい土の上だ。風呂は調理前に裏の井戸で済ませた。

佐伯家へ来てからというもの、鈴は敷地内から一步も外へ出た事はなかった。鈴を外の人に見ら

れる事を久子が酷く嫌がったからだ。

夕食を早々に食べ終えると、蠟燭の火を頼りに一人静かに挿絵の多い本を眺めていた。そこに控えめなノックの音が聞こえてくる。

「鈴ちゃん、まだ起きています？」

「蘭ちゃん？」

「ええ。今日ね、学校でお菓子をいただいたの。一緒に食べましょう」

「……ありがとう」

この家でこんな風に鈴の事を気にかけてくれるのは蘭だけだ。

涙が零れそうになるのを袖で拭っていると、蔵の鍵が開けられた。すると、そこにはすっかりラフな格好に着替えた蘭が両手に盆を持ってにこやかな笑顔で立っている。

「入ってもいい？」

「もちろん。狭いけど……」

「そんな事ないわ。人が一人住むには十分な広さよ。そうだ！ いっそ私のお部屋と交換しない？ 私、暗くて狭い所って落ち着くから好きなのよ。押入れとかお手洗いとか」

そう言って冗談めかして笑う蘭を見て思わず笑ってしまった。

「もう、蘭ちゃんってば」

鈴は蘭を蔵の中に招くと、蠟燭をもう一本点けた。

「まだ蠟燭なの？ お母様ったら、何度言ったらここに明かりを入れてくれるのかしら！」
憤慨した様子でそんな事を言う蘭に、鈴は慌てて両手を振った。

「いいんだよ、私は蠟燭で。それに蠟燭の火つてずっと見てると心が落ち着くの」

「それは確かにそうかもしれないわね。火は人間の心を落ち着ける作用があるって、何かの本で読んだ事があるわ。はい、これ。お茶も持ってきたわよ」

「ありがとう。これはもしかしてチョコレートケーキ？」

蘭が持ってきたのは幼い頃に何度か食べた事があるチョコレートケーキだ。

「ええ、やっぱり知ってたのね」

「うん。懐かしい」

久しぶりに見るチョコレートケーキに思わず目を細めると、蘭は花が咲いたように微笑んだ。

「喜んでもらえて良かった！ でも董ちゃんやお母様たちには内緒よ？」

そう言つて蘭は唇に人差し指を当てて笑うと、チョコレートケーキを2つに切り分ける。

「さあ、食べましょう！」

「で、でも堇ちゃんは食べてないんでしょ？」

「ええ。あの子とはもう一週間も口を利いていないの」

「……また喧嘩したの？」

「ええ、まあね。それよりもほら！ 食べましょう！」

「うん、ありがとう。いただきます」

蘭に手渡されたフォークでチョコレートケーキをそつと刺すと、記憶にあったケーキよりもフワフワで思わず目を見開いてしまった。

しばらく二人で今しがた食べたケーキの話をしていたが、不意に蘭が真顔になって言った。

「ところで鈴ちゃん、うちに縁談のお話が来ているのを知ってる？」

「……うん。夕方、叔父さまと叔母さんが話してるのを聞いちゃった」

「そう。あれね、もしかしたら私が行くことになるかもしれないわ」

「え!?! ど、どうして？」

「お夕飯の時に、お母様と父さまにその話をされたの。もちろん堇ちゃんは嫌がってたわ。だとすれば、残るは私しか居ないでしょう？」

そう言って視線を伏せた蘭を見て思わず机に乗り出していた。

「わ、私が行く！ 蘭ちゃんは夢を諦めないで！」

「え？ で、でもあなたは……」

あまりの勢いに蘭は驚いたように目を丸くすると、じっと鈴の目を見つめてくる。

「私はこんな容姿だし蘭ちゃんの代わりにも董ちゃんの代わりにもなれないけど、叔母さん達もそうするつもりみたいだったし……」

そこまで言つて言葉を詰まらせた。思っていたよりも久子に受け入れてもらえていなかった事がショックだったようだ。

「そんな！ 鈴ちゃんも家族なのに！」

「ありがとう、蘭ちゃん。そう言ってくれるだけで嬉しい」

本当にその言葉が聞けただけで嬉しい。そんな言葉を飲み込んでまた零れそうになった涙を袖で拭う。

「とりあえずもう一度お母様達と話してくるわ」

「うん、ありがとう。蘭ちゃん、チョコレートケーキありがとう」

「ええ。また何かお菓子を貰ったら持つてくるわね。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

そう言つて、蘭は静かに母屋に帰つて行つた。

鈴は布団に転がつて天井を見上げ、さつき食べたチョコレートケーキを思い出して思わず微笑む。いつからだろう、蘭がこんなにも鈴の事を気にかけてくれるようになったのは。そのきっかけは何だったかはもう思い出せないけれど、この家の中で蘭だけが心の拠り所だった。

翌日、目が覚めて蔵から出ると蔵の前に歪な卵焼きと鮭と昆布のおにぎりが手ぬぐいに包まれて置いてあつた。幼い頃にこの蔵で過ごすようになってからこの現象はほぼ毎朝続いている。

最初は不思議に思つていたが、今はもう今日のおかずは何だろうかと思う程度には毎朝楽しみにしていた。こんな事をするのはきつと蘭だろう。

朝食を蔵の中に一旦置いて、そのまま皆の朝食を作りに向かつた。

誰かは分からないが、鈴の為だけに毎朝こうやつて朝食を作つてくれる人がいる。その事実こそが鈴がこの家の事を嫌いになれない理由だったのかもしれない。

朝食を作り終えて後片付けをしていると、珍しく久子がやつてきた。

「ちよつと。手を止めてこちらにいらつしやい。話があります」

「……はい」

内心「きた」と思っていた。久子がこのタイミングで鈴に話など、あの話しかない。

言われるがまま久子についていくと、久子は勇の部屋に案内してそのまま立ち去ってしまう。

「鈴、座りなさい」

「はい」

着物の裾に気をつけながら勇の正面に座ると、じつと勇を見上げた。途端に勇は鈴から目を逸らせる。

「こちらを向くなといつも言ってるだろう」

「ご、ごめんなさい」

突然の勇の声に慌てて視線を伏せると、そんな鈴に安心したように勇は話しだした。

「鈴、お前に縁談が来ている。蘭と董の代わりに嫁ぎなさい。先方はこの屋敷に居る娘とだけ言ってきた。学のないお前には勿体ない話だが、蘭はこの家の跡継ぎで董もまだ女学校に通っている最中だ。昔ならいざしらず、今は女でも学はある方がいい」

「はい」

「つまり、この家から今その縁談を受ける事が出来るのはお前しか居ない。分かるな？」

「……はい」

思わず小声になってしまった鈴の耳に、勇の声が聞こえてくる。

「はあ、本当にお前は菊子にそっくりだな」

「……」

菊子というのは鈴の母親の名前だ。勇は菊子がイギリス人だった父とほぼ駆け落ち同然で家を飛び出した事を、未だに怒っている。

「まあいい。そんな訳だからお前は今日中に荷物をまとめておけ。あちらはしばらくお前の身柄を預かりたいと言ってきている」

「え？」

「なんだ？ 何か問題があるのか？」

「い、いえ」

縁談とは言えまだ顔合わせもしていないし、ましてやしばらく身柄を預かるだなんて聞いた事がない。驚いて思わず顔を上げると、勇と目があつた途端また逸らされてしまった。

「婚前の娘の身柄を預かりたいなどと普通の神経では考えられんが、相手はあの神森家だ。何を言われようとも特別驚くこともないだろう」

「神……森、家……」

鈴にまわしてくるような縁談なのだからあまり大きな家柄ではないだろうと思っていたのだが、神森家は侯爵家だ。

けれど、それを差し引いてもお釣りが来そうなほど曰く付きの家柄でもあった。

「何か不服か？ お前には丁度良いだろう？」

「……はい」

きつと勇は鈴の容姿の事を言っているのだろうと察した鈴は、ただその決定に従う他なかった。呆然としたまま廊下に出ると、そこには葦が大きな目をこちらに向けて、ほとんど睨みつけるように鈴を見ている。

「おはよう、葦ちゃん」

「ふん、あんたが居なくなったらせいせいするわね。やっとこの家も元通りだわ！」

「うん……今までごめんね。ありがとう」

「ほんとよ。あんたが居なくなったらあんな蔵さつきと潰して私の部屋にするんだから！ 荷物ちゃんと全部忘れず持って行きなさいよね！」

そう言って葦は鼻を鳴らしてドカドカと廊下を歩き去ってしまう。そんな後ろ姿をしばらく見送って少しだけ俯いて鼻をすする。

昔は今ほど仲が悪かった訳ではないような気がするのに、何故か最近の董はこうやって突つかかってくる。別に意地悪をされる訳ではないけれど、董の意図が分からなくていつも戸惑ってしまう。けれど董の態度などまだマシだ。間違ひなくこの家の中で誰よりも鈴を嫌っているのは久子だから。

何故そこまで久子が鈴を嫌うのか、その理由はこの時はまだ知らなかった――。

翌朝、いつものように朝食だけを作り、身の回りの荷物を風呂敷にまとめて勇から受け取った衣装に着替えて蔵を出ると、いつの間にか置かれたのか蔵の前いつもの風呂敷を見つけた。

風呂敷の中には三角とも俵とも言えない鈴の大好物の梅とおかかのおにぎりがいともよりも多く入っている。

見かけはいつも不格好だが、このおにぎりが涙が溢れるほど美味しい事をもう知っていた鈴は、それを胸に抱きしめて蔵へ戻ると机の上に今までの朝食のお札に折り鶴を残して家を後にした。

出る前に母屋に寄って声をかけたが、誰からも返事は返ってこない。蘭は今日は学友と朝から出掛けているし、董は頭痛が酷いと言って部屋で休んでいる。勇と久子は言わずもがなだ。

万が一神森家に追い出されても、鈴がもうここへ戻る事はないだろう。鈴はこの家にとって厄災

の種であり厄介者でしか無かったのだから。

久子はもしも鈴が追い出されたら一生蔵に閉じ込めると言っていたが、これ以上手を煩わせるのは嫌だ。その時は潔く一人でどこかで生きていこうと鈴は心に誓った。

約束の時間にはまだかなり余裕があった。神森家は鈴の為にわざわざ家まで迎えを寄越すと言ってくれたけれど、鈴はそれを丁重に断った。

道中一人になる時間が欲しくて一人家を出て、その特徴的な髪と目を隠すために帽子を目深に被り乗合バスに乗る。

神森家は街の中心から外れた山の中にあつた。山の入口までは乗合バスと人力車を乗り継ぎ、そこから神森家の人が送ってくれるという。

生まれて初めて乗ったバスからぼんやりと景色を眺めていると、このままどこかへふらりと行ってしまいたいような衝動に駆られたが、先立つものが何も無い小娘がそんな事を出来るはずもない。

「……神森家……どんな所なんだろう……」

神森家は巷でも噂の変つた家だった。家柄こそ侯爵家という身分で華やかだが、今までに何人もの人たちと縁談をしたにも関わらず、そのどれも一方的に破談にしてきた家だった。

さらに怖いのは戻ってきた娘たちは皆、何故か神森家で過ごした日々をすっかり忘れてしまっていたという。あまりにも誰も覚えていないのでその度に狐に化かされたのか、何かショックを起こすような事があったのかと話題になるのだが、家族がどれだけ訴えても警察は一向に動こうとはしなかった。

それだけ聞けば相当おかしな家だが、何故か実際戻ってきた人たちは神森家の事を覚えていないにも関わらず、皆がもう一度あそこへ行きたいと言うのだそうだ。

余裕を持って家を出たが、ようやく街を抜けた頃には辺りはすっかり薄暗くなっていた。人力車を降りると街灯の明かりだけが森に向かって伸びていく。

その明かりを頼りに森の入り口に向かって歩いていたのだが、何だか森の入り口が騒がしい事に気付いて咄嗟に身を隠した。

目を凝らしてみると森の入り口で数人が何やら頭を突き合わせて話している。その脇には時代錯誤も甚だしい豪華な女乗物が置いてあった。

耳を澄ませると静かな夜景に男たちの声が聞こえてくる。

「次の花嫁は合格かな？」

「どうだろうなあ。あの方はああ見えて厳しい人だから」

「そろそろ早く決めてもらわないと、いつまで経っても力を持つ子が生まれないぞ！」

「それは困る！ あの方だって永遠にここに居られる訳じゃないのに！ 誰がこの土地を守るんだ！」

「そうだそうだ！ そもそも今どきこんなので興入れてしてくるのかなあ。これも絶対に気味悪がられてる原因だと思うんだけど」

鈴は草陰に隠れてしばらくその話を聞いていたのだが、不意に後ろから誰かに足を叩かれた。

「ひっ！」

あまりにも集中していた鈴が驚いて振り返ると、そこには一匹の黒猫がおすわりをしてこちらを見上げている。

「にゃあ」

「あ……びっくりした……猫か……」

ポツリと言って猫を抱き上げようと両手を伸ばしたけれど、生憎猫は鈴の手をひらりと避けて何を思ったか男たちの元へ駆けて行ってしまふ。

しばらくすると、一人の男がこちらに気づいて近寄ってくる。

それを見て咄嗟に逃げなければと思ひ立ち上がって走り出そうとした所で――。

「待つて！　もしかして佐伯の所の娘さん、ですか？」

「！」

その声を聞いて恐る恐る振り返ると、そこにはやたらとリアルな狐の被り物を被った青年が立っている。

それを見て思わず悲鳴を飲み込んだ。あまりにもその被り物は精巧で、まるで本物の狐が二足歩行をしているかのようだ。

「そうです……けど」

怪訝に思ひながらも答えると、青年の声が嬉しそうに跳ねた。

「ああ、良かった！　あ、挨拶が遅れて申し訳ありません。僕は神森家の使いの者です。どうぞこちらへ。神森家までご案内いたします」

「あ、ありがとうございます」

何だかよく分からないし怖いけれど、どのみち鈴にはもう神森家に向かうしかない。

鈴が覚悟を決めてゴクリ息を呑み、青年に付き従う形で時代遅れの女乗物に乗り込むと、目の前で引き戸が容赦なく閉じられた。

『これからどうなるんだろう。私もすぐに追い出されて記憶が無くなるのかな……もう佐伯家にも戻れないのに……』

鈴は佐伯家が嫌いではなかった。母親の菊子からよく聞かされていた勇も、優秀な蘭も、葦の嫌味だつてもう聞けないかもしれないと思うと寂しい。ただ久子だけは本当に鈴を嫌っていた。あの事故の時だつて――。

鈴が上の空でそんな事を考えていると、女乗物が止まり外から威勢の良い女性の声が聞こえてくる。

「着いたよ。ようこそ神森家へ。今期130人目の花嫁候補さん」

それと同時に女乗物の引き戸が開けられた。

乗物の中から外を伺うと、眼の前に見たことも無いほど豪華なお屋敷が建っていた。洋風の見目はモダンで、いつか蘭が見せてくれた鹿鳴館の写真とよく似ている。既に神森家の敷地内なのか、道にあった街灯とは比べ物にならないほど辺りは明るい。

「何してんだい？ さっさと降りといでよ」

「あ、はい」

何だかちやきちやきした人だなと思ひながら恐る恐る乗物から降りて、顔を隠すために伸ばした

前髪越しにチラリと女の人を盗み見ると、目の前にスラっとした艶やかな美女がこちらを見下ろして立っていた。

「あたしは雅だよ。つて、こりゃ驚いた！ あんた異人さん？ さっきは全然気づかなかった！」
「あ……えっと私は……」

鈴はしまった！ と心の中で呟いて慌てて目を隠すように帽子を深く被りなおす。

髪はいくらでも帽子で隠せるが、日本人離れた甘ったるい顔立ちや瞳の色はどうやっても隠せない。

どれほど世間離れしている神森家でも、佐伯の家に居る娘の目が青磁色などとは思ってもいなかっただろう。

だから勇はあれほど鈴に「こちらを見るな」と言ってきたのだ。あまりにも父に似すぎた鈴の姿が許せなかつたに違いない。

神森家は一度縁談を持ちかけた家には二度と声をかけない。そこにどれほど美しくて評判の娘が居ても、だ。

だからこれでいい。その為に鈴はこの縁談を受けたのだ。お世話になった佐伯家に何か恩返しが出来れば、それでいい。

そう思い直した鈴は静かに頭を下げた。

「申し訳ありません。私は蘭でも董でもありません。佐伯家に居候させていただいている、鈴と申します」

「こりやご丁寧にどうもね。で、どうして二人はこないんだい？」

「蘭は佐伯家を継がなければなりません。そして董はまだ女学園に通う身です。なので私が自ら名乗り出たのです」

「なるほどねえ。まあ確かに世間様は随分様変わりしたもんねえ。しかしこりや困ったね。あんたは佐伯とは円も縁も無い訳？ 真正正銘ただの居候？」

「一応佐伯の当主とは叔父と姪の関係にあります。ただ、叔父は婿養子で私に佐伯の血は流れてはいません……」

「すぐさま追い出されるのを覚悟で言うと、それを聞いて後ろで女乗物を担いでいた人たちが息を呑んだのが心配で分かった。」

「なんだ。あんた佐伯の血は流れてないのか。ここでは血がね、重要なんだ。それ以外は何もいらぬ。歴代の花嫁達は皆そう。人形みたいにニコニコ愛想よくしてればいいだけなんだけど……」

「そう言っつてふふんと鼻で笑った雅に思わず引きつると、お屋敷の奥から男の声が聞こえてきた。」

「雅」

たつた一言なのに男の声はとても甘く優しげで、それなのに独特の艶のある声は妙に落ち着く。その声にハツとして思わず視線を上げた鈴の目に飛び込んできたのは、濃紺色の長い髪に明るい紫がかつた青い目をしたどこか儂げで端正な顔立ちの男だ。

「げ、千尋。居たのか」

「居たのか、ではありませんよ。鈴さん、ようこそいらつしやいました。私が神森家の当主、神森千尋です。どうかよろしくお願いしますね」

「あ、はい。えつと……追い出さないんですか？」

「追い出す？ まだ私はあなたの事を何も知りません。あなたも私の事を何も知らない。それなのにどうして追い出すのです？」

「だって、私……蘭ちゃんでも董ちゃんでもないのに……」

それだけ言つて俯いた。そんな鈴を見て千尋は困つたように微笑む。

「ええ、聞こえていましたよ。あなたには佐伯の血は流れてはいない。であれば、あなたの出自を調べるまでです。貴族同士の婚姻であればこちらは董さんであろうと蘭さんであろうと、鈴さんであろうと構いはしません」

「あんた、それはあたしが言った事とさほど変わりが無いと思うがね」

「そうですか？ あなたよりは十分優しいと思いますか」

「どうだかね。その顔と声でそんな嫌味言われたんじや、今すぐここから帰りたくなるに決まってる。今までの失敗を少しも学習していないんじゃないのか？」

「今までの失敗は私だけのせいではありませんよ。自分の事を棚に上げるのはどうかと思います。それに、鈴さんにはどうやら大した問題でも無いようですよ」

そう言つて千尋は鈴を見て微笑んだ。その笑顔は儂げで、どこか水のように冷たい。鈴はそんな事を考えながらも一度深々と頭を下げた。

「ふつつか者ですが、どうぞよろしくお願いいたします、旦那さま」

「千尋でいいですよ。さあ、帽子を取つて楽にしてください。そんなに目深に帽子を被つては、お顔が見えないではないですか」

千尋に言われて鈴はそつと帽子を取つた。その拍子に帽子の中に隠していた明るい小豆色の伸ばしっぱなしのお下げが腰のあたりまで垂れる。

「これは驚きました。両親のどちらかが海外の方なのですね」

「はい。父がイギリス人なんです」

「なるほど。髪も瞳もとても綺麗な色ですね」

「あ、ありがとうございます」

面と向かって誰かにそんな事を言われた事が無くて戸惑う鈴を見て、千尋はおかしそうに肩を揺らした。どうやらからかわれたようだ。

「ちよつと、いつまでこんな所で話してるんだい？ さつさと部屋に案内してやりなよ」

「そうですね。ではお手をどうぞ、鈴さん」

そう言つて差し出された手を指先だけでおずおずと取ると、そんな様子がおかしかったのかまた千尋が笑う。

「これはこれは、どうやら今回は本当に可愛らしい方がいらつしやつたようです」

「……」

「からかつてないで！ 早く！ 案内！」

「はいはい。それでは行きましょう。屋敷の中は広いので、迷子にならないよう気をつけてください」

「は、はい」

こうして、鈴は曰く付きだと噂される神森家に足を踏み入れたのだった。

「鈴さんはもう眠りましたか？」

千尋は気怠げに自室のソファに座って頬杖を付きながら部屋の隅に声をかけると、部屋の隅からニャア、と控えめな声が聞こえてきた。これは肯定だ。

「そうですか。さて、あの子を見てどう思いますか？」

続けて問うと、先程まで猫が居た場所に雅が立っている。

「小さい、白い、気を張りすぎ、あと痩せすぎ」

「そうですね。私もそれが気になりました。白いのは混血だからでしょうが、あの腕や足の細さは少し気になりますね。あと、少し薬品の香りもします」

「調べるのかい？」

「いえ、それほど強い香りでは無いので大丈夫でしょう。ただ佐伯が血の繋がらない彼女をどういう意図でここへ寄越したのかは気になりますね」

「そりゃここの悪評を聞いて居候のあの子をここへやったって考えるのが一番妥当だと思うけど」

「なるほど。自分の娘達は嫁がせたくないけれど、侯爵家との繋がりには欲しいということですか。だとしたら彼女は佐伯の家では不当に扱われていたという事でしようか？」

「まああの栄養失調一步手前の体つき見りやバカでも察するよ。で、どうする？ あの子の世話係増やすかい？」

神森家には使用人は三人しか居ない。一人は炊事場担当の喜兵衛。それから庭師の弥七、そして雑用係兼千尋の助手の雅のみだ。鈴を森の入口まで迎えに行った男たちはあの時だけ雇った者達だった。

千尋は雅の質問に少しだけ考えて首を振った。

「いえ、それはまだもう少し様子を見てからにしましょう。時代は変わったようなのでもしかしたら彼女は自分の事ぐらいは自分で出来るかもしれませんが。とりあえず彼女の出自を調べるのが先でしょう」

鈴の手はとても佐伯家の娘だとは思えないほど荒れていた。あれは間違いなく水仕事をしていた手だ。とすれば、やはり鈴は佐伯の家での扱いはあまり良くなかったと思われる。

「そうだね。それじゃ、あたしは戻るよ」

雅は面倒そうに欠伸をして適当に返事をして出て行ってしまった。

それを確認した千尋はだらしなくソファに横になる。

「面倒ですね、結婚なんていつの世も。たった一時を共に暮らすだけの相手など、誰でもいいと言
うのに」

それでも千尋は慎重にこの縁談を進めなければならない。それが神森家の当主である、自分の役
割なのだから。

神森家には代々という概念はない。何故なら神森家は始まった時からずっと千尋が当主だからだ。
もつと言えば千尋は1000年ほど前からここを守る龍神だ。

色んな土地に今も龍神伝説が残っているが、そのほとんどは千尋のような龍族の者の事である。
けれど、龍も万能ではない。一つしか無い体でこの国を守るのは到底不可能だ。

その為に必要なのが、龍の神通力を受け取る事が出来る娘だった。

それこそ昔は龍に嫁ぐのは名誉な事だとして巫女があちらから嫁いで来たが、今はもうそんな時
代ではない。

龍神の花嫁となった娘は月に一度その体に神通力を受け入れなければならない。そうして神通力
を宿した娘の卵子は各地に居る巫女の末裔達に配られ、龍神の神通力を以てその地を守る。これが
龍神の最も重大な役割だ。

けれど生まれてくる子が全て千尋の神通力を宿している訳ではない。強い神通力を持つ子もいれば、そうでない子もいる。だからこそ選ぶ相手は慎重にならなければならなかった。少しでも強い力を宿せるように。

そんな龍神の結婚相手に最も重要なのは血だ。

龍はその人の中に流れる水の流れを知ることが出来る。体の中に流れる血液が穢れていては、神通力も通らない。そしてこの流れは大体一緒に住んでいる者たちや血縁者は似通っている。だから千尋は一度破談になった家にはもう二度と声をかけない。

昔であればそれこそ庶民の中からでも巫女の力さえあれば嫁いできたものだが、時代が変わるとそれが難しくなってしまった。今の世は貴族は貴族同士でなければ婚姻は難しい。

色々と面倒ではあるが、それが龍の都を追放されてこの地に降りた龍に課せられる罰である。